

バウムガルテン『形而上学』（第四版）
「経験的心理学」訳注

——その6——

樋 笠 勝 士
井 奥 陽 子
津 田 栞 里

まえがき

本訳注は「バウムガルテン『形而上学』（第四版）「経験的心理学」訳注—その5—」（『成城文藝』第245号）に続く箇所を訳したものである。

『形而上学』（第四版）の第二部「心理学」の第一章「経験心理学」の論考は本訳稿を以て下位認識能力論から上位認識能力論の部門へと移行する。経験的心理学の議論は、その冒頭で、認識能力をもつ魂が「広義の知性」として一般的に規定されたあと、判明性をもつ認識と渾然性をもつ認識とに分かたれた（§ 519-520）。後者は、下位認識論として、感官（sensus）に始まり、記号的能力（*facultas characteristica*）に至るまで、各々の能力的地位を徐々に上位へと上昇させていく仕方で規定を重ね、下位認識能力論の目的を全うする。こうして、判明性をもつ認識を論じる上位認識能力論が始まるが、最初に規定を受ける能力は、冒頭箇所と対応している「知性（*intellectus*）」である。

さて、「知性」は、哲学史的伝統の中で認識論的には中心的な主題であった。古典期ではプラトンが真実在たるイデアを觀照する魂の高次の能力として、また魂の三部分説の中で欲望や気概を支配する高次の能力として、またアリストテレスは受動知性に働きかけて觀想（*theoria*）を実現させる根拠となる能動知性の議論を以て、肉体から離れた永遠なる知性の可能性を示唆している。さらにプロティノスは階層的に一者（神）と魂（感性界）の間に知性（界）を位置づける。これらの議論は

中世キリスト教哲学に知的根柢を与え、知性は神と人間との間に位置づけられた天使的知性、或いは高次の人間的知性としての地位を与えられることになる。以上の認識論に特徴的なのは、諸能力を、不完全な物体界乃至現象界から完全なる超越者に至るまでの存在全体の系列に対して対応する仕方では配置するという序列的な捉え方である。このように捉えられるならば「知性」は超越者に次ぐ高次のもの、或いは高次の超越的な認識能力と理解されるのは自然であろう。

これに対してバウムガルテンは諸能力を全体的な系列に配置して段階づけることはしない。むしろ、諸認識を上位と下位など明確に区別し、各々の中で諸能力を配置する。実際、彼は、下位認識能力論の枠内で認識の完全性を論じると共に、また上位認識能力論の枠内でも同様のことを論じている。バウムガルテン自身の定義によれば、広義の「知性」とは「或るものを認識する能力」 (§. 519) であり、また狭義の「知性」は「判明に認識する能力 (§. 69, 216)」である。従って、「知性」は、下位認識全体に対する仕方では、上位認識全体を特徴づける能力の名称となる。それは、個々の下位認識能力が「感性的 (sensitivus)」とされるのに対して、個々の上位認識能力が「知性的 (intellectualis)」と形容される点でも確認できる (§. 575, 607, 612, 619, 632)。バウムガルテンにおいては「感性的」と「知性的」は一对の総称的術語なのである。他方で、バウムガルテンは知性的な上位認識能力を「神の知性 (intellectus Dei)」からも明確に区別する。神は「知性的実体であり、霊であり、判明に認識する」 (§. 863) が、身体や感覚はもたないから「下位認識はしない」 (§. 870)。ここから知性的な上位認識能力論は、下位認識を伴う限りでの人間的知性であることになる。換言すれば、人間的知性とは、身体や感覚を常に伴う人間的活動の限りでの判明な認識能力であるから、決して現世を超脱する如き高次の能力ではないのである。

さて、本訳稿の上位認識能力論の議論の順序は「知性」から始まり「理性 (ratio)」へと進む。「知性」が上位認識能力の全体を包括的に表す術語であるならば、上位認識能力論が「知性」から論じ始めるのは、続く「理性」をも包含するような上位認識の諸能力全体の総論的立場があるからであろう。従って、先ずは下位認識への関わり方が総論的に示されることになる。それは、感覚的事物に「注意する (attendere)」や「注意をそらす (abstrahere)」の下位認識を行使した結果たる知覚内容

に対して、知性が介入し能力を行使する「反省」や「比較」という上位認識能力の操作である。ここで上位に立つ知性が下位の所産に対してもつ認識目的は「理解 (conceptio)」であるが (§. 632)、その「理解」には限界があることから、人間的知性の限界も明確にされる (§. 633)。「私の知性を越える (supra meum intellectum)」 (§. 633) とは、経験的な生に生きる人間的知性一般の限界を表すものであり、ここでも知性の非超越的性質を確認できる。従って、彼が「知性の美 (pulchritudo intellectus)」 (§. 637) と言うときも、一方ではそれは、現象の完全性や、趣味能力によって観察可能な完全性としての美なのであって (§. 662)、言わば人間的知性の完全性という理想的境地であり「快をも与える」 (§. 662) のだが、しかし、他方では人間的知性の限界内における「理解」の活動の完全性や美であって、魂の諸能力の中で高次の能力が発動したことを意味するものではなく、また超越的な観照を意味するものでもない。「知性」とは、このように身体と感覚をもつ人間の上位認識全体を包括する一般的能力を意味するものであるから、彼が知性の使用に関して「子供」や「成年」に言及することも (§. 639)、また「知性」を Verstand と訳し (§. 637)、知性を説明する「理解」も das Versteh[e]n oder Verständnis einer Sache と近似的に訳すことも、上位認識能力全体への関心をよく表していると言える。

バウムガルテンは「知性」を、総論的に上位認識を語るために導入したとするならば、続く「理性」は、一般的な「知性」や「理解」の概念を一層絞っていく内容となるであろうことは容易に想像できる。実際、彼が知性の働きをより詳細に「事物の連結を洞察する知性」と説明するときには「知性」が「理性」と言い換えられている (§. 640)。ここで「知性」は「理性」として、伝統的な理性概念である推論的過程に関する能力として特化されている。それは諸表象の「連結 (nexus)」を判明に捉える操作であり、この「連結」には必ず「理性に適った根拠 (ratio)」と「理性に適った帰結 (rationatum)」との一対の組み合わせがある。もちろん、この合理的な連結は誰にでも認識できるものではなく、あらゆる人の「私の理性」の個人的な生の限界によって時に「理性の圏域外」におかれたりもすることから (§. 644)、理性の推論における真偽や、理性の習性や陶冶 (§. 645-646)、そこから多様な人間的資質のタイプを描けるようになる (§. 648)。

さて、バウムガルテンは intellectus を Verstand、ratio を Vernunft と独訳したが、カントにおいては前者が「悟性」、後者が「理性」に当たる。通常、哲学的にはカントにて「知性・悟性」と「理性」の地位が逆転したと評価される。カントにおいては逆転であろうが、それを準備したのはバウムガルテンではないだろうか。というのも、彼は身体や感覚をもたない「神の知性」の働きと、常に下位認識能力を伴う「人間の知性」の働きとを峻別し、「神の知性」に対する仕方で、人間的知性に様々な限界を付した。その結果、もはや「人間の知性」は人間的認識能力の中で「(下位に対する) 上位」をまとめる一般的意味しか持ち得ず、他方で、デカルト以来「理性」が人間的能力の支配権を握る地位を固めてきた史的営為もバウムガルテンに届いている。ゆえに、もしも「神の知性」に全く言及しない認識論を構築するとすれば、「神の知性」の概念に対峙する意義をもっていた「人間の知性」の概念は、そのあまりに包括的な「理解する」という全体的な意味のままに人間の上位認識の基礎条件的性質をもつみに留まる。これに対応して、数学的自然科学の興隆と啓蒙主義の時代の下では、「比」や「根拠」の意味をもつ「理性」に多くの期待がかけられてくることになるのは、むしろ当然と言わねばならないであろう。

第十二節 知性

§. 624

私の魂は或るものを判明に認識する (§. 522)。或るものを判明に認識する能力は《上位認識能力》^a (精神) すなわち知性であり (§. 402)、これは私に適合する知性である (§. 216)。

^a das obere Erkenntniss-Vermögen.

§. 625

私は注意する能力すなわち《注意》^a と、注意をそらす能力すなわち《反注意》^b を (§. 529)、また全体から部分を分離したり、全体から部分へ注意をそらしたりする能力をもち (§. 589)、そしてそれらの能力は感覚内容や想像内容や予見内容等にあらわれるのだから (§. 538, 600)、それらの能力の客体が私の身体に対してもつ関係とちょうど同じように、それらの能力は身体の位置に応じて宇宙を表象する魂の力によって現実化される (§. 513)¹⁾。

^a das Vermögen der Aufmercksamkeit, oder auf etwas zu achten. ^b der Absonderung, oder sich etwas aus den Gedanken zu schlagen.

§. 626

知覚の全体のうちの部分に継起的に向けられた注意は、《反省》^a である。反省の後で知覚の全体に向かう注意は、《比較》^b である。私は反省する。私は比較する。したがって、私は反省し比較する能力をもち (§. 216)、それらの能力は、身体の位置に応じて宇宙を表象する魂の力によって現実化される (§. 625)。

^a Ueberlegung. ²⁾ ^b Vergleichung, das Zusammenhalten.

§. 627

注意の法則は次のとおりである。〈私が或るものについて、他のものもつ徴標よりも、より多い徴標やより少なく不明な徴標を知覚するとき、私は他のものよりもその或るものをより明瞭に知覚している〉 (§. 528)。それゆえ、反省の規則は次のとおりである。〈知覚の全体に対する部分があつ、より多い徴標やより少なく不明な徴標を私が知覚すると

き、私は他のものよりもそれに注意している〉 (§. 626)。また、比較の規則は次のとおりである。〈知覚の全体のうちの部分を反省するとき、私はその知覚の全体がもつより多い徴標やより明瞭な徴標を知覚しつつ、それに続いてより強く注意する〉 (§. 529)。

§. 628

注意が最小であるとすれば、それは一つの最小の知覚を、最も不明な残りのものよりも、ただ一つの程度分、より明瞭にする場合であろう。それゆえ、より多くより大きな知覚を、より明瞭な知覚よりもより明瞭にするほど、その注意はいっそう大きい (§. 219)。より多くのものを統覚する習性は《注意の拡張》^aであり、或るものをより明瞭なものに比してさえ、非常に明瞭に統覚する習性は《注意の強度》^bである。より長い時間をとおして同じものに注意する習性は《注意の持続》^cである。

^a die Erweiterung, Verbreitung oder Ausdehnung. ^b die Anstrengung.
^c das Anhalten der Aufmerksamkeit.

§. 629

反注意の法則は次のとおりである。〈私が或るものについて、他のものがもつ徴標よりも、より小さい徴標やより少なく明瞭な徴標を知覚するとき、それらの徴標は他のものがもつ徴標よりもより不明に表象されている〉 (§. 528)。それゆえ、分離の規則は次のとおりである。〈知覚の全体に対する部分がもつ徴標が、他のものよりもより小さい徴標やより少なく明瞭な徴標であるならば、それらの徴標は他の徴標よりも不明に知覚されている〉 (§. 625³)。

§. 630

反注意が最小であるとすれば、それは一つの最小の知覚を、最も明瞭な残りのものよりも、ただ一つの程度分、より不明にする場合であろう。それゆえ、より多くより大きな知覚を、より不明な知覚よりもより不明にするほど、その反注意はいっそう大きい (§. 219)。

§. 631

私の知性の法則は次のとおりである。〈もし私が比較するとき比較

されていないものから注意をそらすならば、残されたものは判明に知覚されている) (§. 627)。私の知性は限界づけられているから (§. 248)、この法則は限界づけられた知性の法則である。限界づけられた知性は、注意、反省、比較、反注意、分離をとおして、宇宙を表象する魂の力によって現実化される (§. 625, 626)。

§. 632

知性による事物の表象は、その事物についての《理解》^aである。それゆえ、《理解可能なもの》^bとは、その事物についての判明な知覚がたちづくられうるものである。また、《それ自体で理解可能なもの》^cとは、それ自体をみれば、判明に理解されうるものである。ところで、あらゆる可能なものには本質と変状 (§. 53, 43) があり、それらは相互に区別されうる程度には (§. 67)、全面的には同じでない (§. 267, 41)。したがって、あらゆる可能なものにおいては、明瞭に認識することができる徴標があり、それゆえあらゆる可能なものはそれ自体で理解されうる。

^a das Verstehn oder Verständnis einer Sache. ^b verständlich, begreiflich. ^c in und an sich selbst.

§. 633

《それ自体で理解不可能なもの》^a (絶対的に理解されえないもの) があるとすれば、それは、それ自体をみれば、その事物についての判明な知覚が覆い隠している場合であろう⁴⁾。これはたんなる無である (§. 632, 7)。他方で、《然々のようなものと相対的に理解可能なもの》^bとは、或る所与の知性もつ力があるがその事物を判明に認識するために十分であるものである。また、もし所与の精神もつ力があるがその事物を判明に知解するために十分でないものは、《相対的に理解不可能なもの》^c (所与の知性を越えたところに位置づけられているもの) である。それゆえ、それ自体でよく理解されうる多くのことは (§. 632)、私の知性を越えたところに位置づけられうる (§. 631)。

^a an sich selbst unverständlich und unbegreiflich. ^b diesem oder jenem begreiflich und verständlich. ^c diesem oder jenem unverständlich und unbegreiflich.

§. 634

判明性とは事物と事物の徴標とがもつ明瞭性であるので、判明性は徴標がもつ外延的な量の多さと明瞭性によって増大されうるのと同様に、内包的な量の多さと明瞭性によっても、増大されうる。他の判明な知覚よりもより多くより生動的な徴標をもつ知覚は、《外延的により判明な知覚》^aであろう。他の判明な知覚よりも内包的により明瞭な徴標をもつ知覚は、《より純粋な知覚》^b（内包的により判明な知覚）であろう。

^a eine Vorstellung von verbreiteter Deutlichkeit, ^b eine reinere Vorstellung.

§. 635

私が反省や比較によって、事物により大きく注意を向けるほど、その事物に対する知性作用は外延的により判明になる（§. 634, 631）。私が反省や比較によって、知解されたものもつ徴標に、再びいっそう注意するほど、また比較されていないものからいっそう注意をそらすほど、知性作用はより純粋なものとして生産される（§. 634, 559）。

§. 636

私が事物に対してより少なく注意を向けるほど、あるいは十分に注意しながらもそれでもなおいっそう少なく反省するほど、またあるいは十分に反省しながらもそれでもなおいっそう少なく比較するほど、その事物に対する知性作用は外延的によりいっそう小さく判明になる。これらと同様の行為を、知解されたものもつ徴標に関して私がより少なく繰り返すほど、〔また〕比較されていないものから私がより少なく注意をそらすほど、判明な知覚はいっそう不純なものにとどまる（§. 634, 631）。

§. 637

最小の知性があるとすれば、それは一つの最小のものもつ最も少ない⁵⁾ 最小限に明瞭な徴標および最大限に弱い知覚内容を、先行する連合した異種の知覚内容のあいだで区別する場合に他ならないであろう。したがって、知性がより多くより大きなものどもがもつより多くより明瞭な徴標およびより強い知覚内容を、先行する連合した異種の知覚内容の

あいだで区別するほど、その知性はいっそう大きくなる (§. 219)。内包的に判明な徴標を形成するという知性の完全性は《深淵性》^aであり、より大きな深淵性は《純粹性》^bである。外延的に判明な徴標を形成するという知性の完全性は《知性の美》^cである⁶⁾。

^a ein tiefer, ^b ein reiner, ^c ein schöner Verstand.

§. 638

もし多くの連合した異種の知覚内容へと私が注意を向けているあいだに、或る特定の客体へ向けられた注意が弱まれば、《私は散漫である》^a。したがって、その感覚は散漫さによって不明にさせられ (§. 543)、或る特定の客体に向けられた注意はすべて、散漫さによって妨げられる (§. 221)。散漫な心による多くの異種の知覚内容からの反注意 [= 散漫な心が多くの異種の知覚内容から注意をそらすこと] は、それによって或る特定の客体に向けられた注意が増大させられるならば、《心の集中》^aである。それゆえ心の集中は、そしてまさに反注意は、散漫さを妨げることである (§. 221⁷⁾)。ところで [注意を] 妨げるものを妨げることは、目的のための手段である (§. 342)。それゆえ、心の集中と反注意が注意を促進するであろうことは、第 549 項からも明らかである。注意は反注意を、それゆえ心の集中を促進するであろう (§. 529)。

^a Zerstreuung, ^b Sammlung des Gemüthes.

§. 639

知性をとおして判明な知覚内容を現実化する者は、知性を用いている (§. 338)。知性を用いる習性は《知性の使用》^aと呼ばれ、これは私に習得される習性である (§. 577)。知性の使用が、いまだ話すために要求される程度までは習得されていない者は、《子ども》^bである。依然として共同生活のなかでのより重要な務めのために多くの場合に要求される程度まで習得されていない者は、《本来的に未成年》である。共同生活のなかでのより重要な務めのために多くの場合に要求される程度まで習得された者が、《本来的に成年》であるように。知性の使用が、多くの同年代の者よりも顕著に少ない者は、《悪い意味で単純》^cである。同年代で普通によく見受けられる程度まで、まったくまたはほとんどないと思受けられたなら、その者は《分別がない》^d。

^a der Gebrauch des Verstandes, ^b ein Kind, ^c einfältig in schlechter Bedeutung, ^d die nie zu, oder von Sinnen und Verstand gekommen.

第十三節 理性

§. 640

私は或るものの連結を渾然と知覚し、また或るものの連結を判明に知覚する。したがって、私は事物の連結を洞察する知性 (§. 402, 216) すなわち《理性》^aと、連結をより渾然と認識する諸能力をもつ。後者は次のような能力である。1) 事物の同一性を認識する下位能力 (§. 572, 279)。これは感性的資質である (§. 575)。2) 事物の差異性を認識する下位能力 (§. 572, 279)。これは感性的鋭敏さである (§. 575)。3) 感性的記憶力 (§. 579, 306)。4) 創作する能力 (§. 589)。5) 判定する能力 (§. 606, 94)。これは感性的判断力 (§. 607) と感官による判断力である (§. 608)。6) 類似した事例への予期 (§. 610, 612)。7) 感性的記号的な能力 (§. 619, 347)。これらすべての能力は、事物の連結を表象する点で理性に似ているかぎり、《理性に類比的なもの》^b (§. 70)、つまり連結を渾然と表象する魂の能力の総体を構成する。

^a die Vernunft, ^b das der Vernunft ähnliche.

§. 641

事物の同一性と差異性を判明に洞察する能力 (§. 572, 579⁸⁾)、すなわち知性的な資質と鋭敏さ (§. 575)。知性的記憶力あるいは《人格性》 (§. 579, 306)⁹⁾。判明に判定する能力 (§. 606, 94)、これは知性的判断力である (§. 607)。知性的予感力すなわち《予知》^a (先見) (§. 610)。知性的記号的な能力 (§. 619)。これらが理性である (§. 640)。

^a Vorsicht.

§. 642

この世界におけるあらゆるものは宇宙の連結のうちにあるから (§. 356-358)、身体状況に応じて宇宙を表象する魂の力によって、理性は現実化される (§. 631)。そして、このことは次の規則による。〈もし私

がAのなかに或るもの¹⁰⁾ Cを明瞭に認識し、なぜその或るものがBのなかに明瞭に認識されるべきであるかを、その或るものから明瞭に認識するならば、私はAとBを連結されたものとして理解している) (§. 14, 632)。

§. 643

何らかの根拠 [ratio]¹¹⁾ から認識されうるものは《合理的なもの》^a と言われ、いかなる根拠からも認識されえないものは《非合理的なもの》^b (理性に反する) と言われる。ところであらゆる可能なものは、二重の仕方では合理的なもの、つまり連結されたものである (§. 24)。合理的なものかつ連結されたものの根拠は、帰結と同様に、両者の間の連結でもって、それ自体として理解されうる (§. 632, 14)。したがって、あらゆる可能なものは合理的である。あらゆる非合理的なものは、それが理性に反するものは何であれ、不可能なものである (§. 7, 8)。

^a vernünftig. ^b unvernünftig.

§. 644

或る者がもつ所与の理性の力が、その連結を知解するために十分でない場合、それは《所与の理性の圏域の外に》^a (あるときは下方に、あるときは上方に、またあるときはどちらでもないが、その地平の外に) 位置づけられる。したがって或る者の理性が、私の理性のように (§. 631, 640) 限界のある場合、多くの合理的なものが、その者の理性の圏域の外に位置づけられうる (§. 643)。

^a von diesem oder ienem nicht vernünftig einzuseh[e]n.

§. 645

最小の理性があるとすれば、それは一つのものがもつ最小の連結を洞察する最小の知性であろう。したがって理性は、より大きな知性がより大きなより多くのものどもがもつ連結を洞察するほど、いっそう大きくなる (§. 219)。事物のより大きな連結を洞察する習性は《理性の堅固さ》^a であり、事物のより多くの連結を洞察する習性は《理性の明敏さ》^b である。それゆえ、理性もまたより純粹であるか、より純粹でないかのいずれかである (§. 637)。

^a eine gründliche. ^b erfindsame Vernunft.

§. 646

理性による知覚内容は《理性推論 [ratiocinia]》^aであり、それが真であった場合には《健全な理性 [= 論理]》^bと言われ、それが誤りであった場合には《損なわれた理性》^cと言われる。真の理性推論の総体は《客観的に捉えられた理性 [= 根拠]》^dといわれ、それは主観的に捉えられたものとして (§. 640) 定義された理性と対比的に区別される。《理性の使用》^eは、理性を使用する習性であり、これは私に獲得された習性である (§. 577)。この習性を強化することは、《理性の陶冶》^fである。それゆえ、真理についてのあらゆる哲学的認識は、理性を陶冶する (§. 577)。三段論法上の誤った規則は、理性を著しく損なう。

^a Vernunft-Schlüsse; Beweise des Verstandes. ^b eine gesunde. ^c eine verderbte Vernunft. ^d die Vernunft vor ihren wahren Gegenstand gesetzt. ^e der Gebrauch. ^f die Bearbeitung der Vernunft.

§. 647

理性に類比的なものの誤謬を損なわれた理性に帰する者は (§. 640, 646)、鋭敏さが欠落しているために、事物の同一性を認識する能力がその者を惑わしている (§. 576)。だがもしそれらの誤りが前提とされるならば、この種の誤りは理性を損ないうる (§. 646)。

§. 648

私のうちのあらゆる認識能力には限界があり、それゆえ、或る特定の規定されうる限界をもつのであるから (§. 248, 354)、魂の認識能力は互いに比較される時、或る合理的な比率と規定された均衡を互いに受け入れる (§. 572)。ゆえに、ある能力は他の能力よりも大きいかあるいは小さいかのいずれかである (§. 160)。或る者の認識能力がもつ互いに規定された均衡は、その者がもつ《広義の資質》^aである。資質は、それに多くの習性がある場合は《生氣溢れる資質》^bであり、習性がわずかであるか、まったくない場合は《怠惰な資質》^cである。怠惰な資質から生氣溢れる資質へと変化するならば、資質は《利発になり》^d、生氣溢れる資質から怠惰な資質へと変化するならば、資質は《愚鈍にな

る》^e。広義の資質において或る能力が他の能力よりも大きいとき、広義の資質が認められた主体に対して名前を与える。それゆえ明らかのように、それは《より優れた意味で、才能溢れる [ingeniosi] 者、鋭敏な者、記憶力に優れた者、予見に優れた者、判断力に優れた者、知性溢れる者、合理的な者》^f 等である。

^a Kopf, Gemüths Faehigkeit, ^b munter, ^c langsam, ^d Wird aufgeweckt, ^e Wird stumpf, eingeschlaefert, ^f Witzig, scharfsinnig, von gutem Gedächtnis, guter Vorsicht, Beurtheilungs-Kraft, verstaendig, vernünftigt in ausnehmender Bedeutung.

§. 649

認識能力が或る特定の均衡において相互にそのものを関わらせるとき、或る特定の種類の認識対象に対しては、他の種類の認識対象よりも適しているのだから (§. 648¹²⁾)、他の種類の認識対象よりも或る特定の種類の認識対象に適した広義の資質は、その種類の認識対象から名前を受け取る。それゆえ明らかのように、それらは《経験的資質》、《歴史的資質》、《詩的資質》、《予言的資質》、《批評的資質》、《哲学的資質》、《数学的資質》、《職人的 [mechanica] 資質》、《音楽的資質》等である。あらゆる種類の認識対象に顕著に適している広義の資質は、他の多くの資質よりもより適しているものとして、広義の《普遍的資質》^a と呼ばれる。また広義の資質は、非常に多くの認識能力の段階において他の多くの資質におおいに勝っているかぎり、《上位の資質》^b と呼ばれる。

^a allgemeine, ^b höhere Geister oder Genies.

§. 650

《習慣》^a とは、特定の行為において注意の必要性を減少させる習性である。ところで理論上は、獲得されたあらゆる習性が広義の資質を変化させる (§. 577, 648)。それゆえ、広義の資質は訓練と習慣によって、しばしば変化させられたり大幅に変化させられることで、利発にも愚鈍にもなりうる (§. 648)。それゆえ、何らかの資質をもつ者が判断力に優れた者へとなりうること、また詩的資質をもつ者が哲学的資質をもつ者へとなりうること等は明らかである (§. 649)。

^a Gewohnheit.

訳注

- 1) 最終文の「私の身体に対してもつ関係とちょうど同じように」とは、以下の事柄を意味している。客体が表象される場合、それは主体の身体によって限定される仕方では現実化される。それと同様に、注意と反注意の能力は身体によって限定される仕方では働く (cf. §. 509, 512)。
- 2) Ueberlegung は、第四版では Ueberlegnng となっているが、これはたんなる誤植であろう。
- 3) この参照指示は、第一版では §. 628 となっている。
- 4) §. 559 の定義より、「覆い隠す」は「不明にする」という意味だと理解できる。Gawlick と Kreimendahl による独訳は、続く箇所では参照指示がなされる §. 7 に *contradictionem involvere* 「矛盾を含む」という用例があるため、本項の *involvere* も「矛盾を」という目的語を補って読んでいる。しかし §. 7 は「無」の定義をした項であり、本項での §. 7 への参照指示は次の「これはたんなる無である」という文章に付されたものだから、本訳注ではこの解釈を採らない。英訳は「隠されている」と訳すが、ここで *involvere* は能動態で使用されている。なお、この文は非現実を表す接続法で記述されているが、第一版では直接法が使用されていた。
- 5) 「最も少ない」は第二版以降の追加である。
- 6) 美は「現象の完全性、ないし広義の趣味によって観察されうる完全性」 (§. 662) または「感性的認識そのものの完全性」 (AE §. 14) と定義される。美が現象として感性的にのみ捉えられるものであるかぎり、この完全性は、外延的明瞭性が高まることによって増大する (cf. §. 185, 531; MP §. 17)。外延量が美に結びつけられることから、本項の最終文では、外延的判明性を与えるという上位能力の作用に対しても美が認められる。つまり「知性の美」は、『美学』で「理性に類比的なものが強い生動性をもつことの、精神にとっての自然な帰結が、知性の美と《理性の美》すなわち外延的に判明な連結についての洞察である」 (§. 38) と述べられるように、下位能力との類比をとおして導出される概念である。
- 7) この参照指示は、第一版では §. 222 になっている。
- 8) この参照指示は、第一版では §. 572, 279 になっている。
- 9) 経験的心理学に属する本項において、*personalitas* とはかつてその人自身が再生した表象を再認識すること、つまり思い出すという記憶力に裏付けられた「人となり」を意味する (cf. §. 579)。この語は合理的心理学でもいくつかの用例を確認することができ (e.g. §. 756, 783)、例えば §. 782 では死後の魂が保持する性質の一つとして、霊性 (*spiritualitas*) と自由 (*libertas*) と並ぶ「人性」の意で用いられる。
- 10) 「或るもの (*aliquid*)」とは、矛盾律に抵触しないもの (cf. MT §. 7)、すなわち「可能的なもの (*possibile*)」を意味する (cf. MT §. 8)。

- 11) 「根拠」と「帰結」および「連結」については、「訳注——その2——」の訳注9を参照のこと。存在論ではratioが客観的対象としての「根拠」の意味で用いられるが、経験的心理学では同じ語が、根拠と帰結の連結を判明に認識する能力である「理性」の意味でも用いられる。
- 12) この参照指示は、第二版での追加である。